

寺報

信仰文化

特集版 通刊34号

千葉県いすみ市荻原2136 ☎0470(86)3816

行元寺発行

FAX 同上

歓迎

大人の休日倶楽部

いすみの魅力秘話



波の伊八「波と宝珠」

北斎「神奈川沖浪裏」の原風景とされる武志伊八郎信由の作、この彫刻は文化3年ごろ完成している。

北斎名画のルーツ

北斎が読本の挿絵を描き始めたのは、文化元年（一八〇四）頃であろうか、それから数年間は挿絵に勢力を集中し、独特の画法で人気は頂点に達していた。

その頃は、北斎は馬琴の家に食客となっていた。それはあたかも門弟のようで、北斎が麻裏草履をはいて外へ出ると、馬琴が後ろからついてきたほど親密であった。「新編水滸画伝」にしても「椿説弓張月」にしても、読本は爆発的人気を勝ち得ていたのである。

この頃、馬琴は名前だけ知られていた八犬士を、「里見記」「里見九代記」それに「房総志料」を手元に置いて「南総里見八犬伝」の構想を練っていた。この中の「房総志料」は長者町（いすみ市岬町長者）の中村国香が執筆したもので、南総の雑談や奇説など収載されていて、八犬伝執筆に果たした役割は大きいとされる。こ

の「房総志料」の冒頭が「上総行元寺」の項で始まるのも奇縁で、北斎も目にしたかと思ふ。

文化三年

南総へ旅立ち

北斎の南総行脚の一つの目的に、八犬伝の挿絵との関係が考えられ、上総や安房の風土を知る上で必要だった。文化三年（一八〇四）六月頃、北斎は南総へ旅立ちをする。

このことは木更津の日枝神社の奉納額「富士の巻狩り図」に「画狂人北斎旅中画」とあることから立証されている。そのあとの足跡は詳かならずで知る由もないが、梅暮里谷峨が久留里で「山椒大夫」を執筆していて、その挿絵を頼まれていたらしい。谷峨は久留里藩士で本所埋堀藩邸に住し、江戸詰大目付役の立場から梅暮里を号として、戯作に励んでいた。

ライバル京伝と豊国の「白藤源太」

ほかに北斎の南総行脚には幾つかの事由が推考されるが、北斎に対し読本挿絵を精力的にこなしていた者に「豊国」

（次ページへつづく）

がいた。挿絵画家として北斎同様、その人気は衰えを知らず、大衆受けの作品を次々と発表していて、いわばライバルの存在であった。

この豊国に伍して爆発的人気の戯作者に、山東京伝と弟の山東京山がいた。ともに南総の夷隅郡神置村（現いすみ市神置）の出といわれる「白藤源太」の話をもとめて、「白藤源太談」また「花角力白藤源太」を執筆中で、豊国や国貞が挿絵描きに励んでいた。白藤源太は人気力士で、新内節に歌舞伎に登場、豊国の「白藤源太」の錦絵も人気絶頂ともなっていた。白藤源太の物語が発刊されたのが、文化四年二月であるが、北斎は源太の生地、その地方にも関心を抱いたかと考える。

伊八への関心と 外房の波濤

一方、北斎は伊八への関心は強かった。日蓮宗信者の北斎は堀之内（東京杉並）の妙法寺で伊八の彫刻に触れていて、ことのほか伊八に関心を抱く。伊八は文化三年頃、凝視続けていた太東崎の荒波を念頭に、行元寺で波図彫刻に没頭していた。



波と鶴 一波の伊八

堤等琳と 弟子の等隨

さらに堤等琳の弟子等隨が

伊八の波は横波で、動物が牙をむき出し迫ってくるような迫力がある。それに波間から今しも昇ろうとする真紅の太陽、波間に漂う鶴、それは写真そのもので、波の裏まで描いた陰影、立体的な表現、表裏一体の両面彫りがそこにあった。

それは俯瞰ではない。視点ができるだけ低くして波を描き、座して見上げる角度で彫っている伊八の作と、外房の光景をみるために北斎の南総行脚はあった。

波は瞬時として留まることを知らない。現れたかと思えば消え、消えたかと思えば押し寄せてくる。北斎は以前から伊八同様に波に対する関心は絶大で、美人画の世界から脱して、その頃「おしをくりとうせん」の「賀奈川沖本楚之図」といった作品を物していた。

等琳の 画風を慕い

文化元年に北斎は護国寺（東京・文京）で、百二十畳分

もある大紙に、酒樽に入れた墨、それに大葉筆で半身達磨を描いた。そこには等琳がいて、首をかしげていたものの、一覽して大いに驚嘆したという。

このあと北斎は堤等琳の画風を慕って、単なる友人から師弟関係へと深まっていく。これは北斎の南総行脚に接点があったと考えてよい。

飯縄寺の天井画と 北溪の絵馬

行元寺の伊八の波、等隨の鷹図、飯縄寺の等琳の天井画、そして伊八の彫刻、外房の波濤を見ることで、北斎は南総に足跡を記したに違いない。

飯縄寺近くの長者町に「房総志料」筆者の中村家がある。すぐ傍らの天神社には、北斎高弟の魚屋北溪の絵馬、江戸屈指の間屋「伊勢八店」が伝わる。前述の妙法寺にも、北斎を中心とした人物画や北溪の絵馬があるという。

神奈川沖 浪裏の誕生

南総行脚から江戸に帰った北斎は、馬琴といさかいを生じ、挿絵を描かなくなったので、「新編水滸伝」後編の刊行に、

版元は困って馬琴をおろして、高井蘭山が引き継いだ一件がある。あれほど密であった二人の人間関係も、文化九年頃には絶交状態となつて、北斎は読本の挿絵の世界から遠ざかっていく。

天保二年（一八三一）北斎は七十二歳になつていた。「富士三十六景」の刊行が始まり、風景画中心の活躍期に入った。

この中で「神奈川沖浪裏」は、その粗型が「おしをくりとうせん」などに求められるが、伊八の波図彫刻の感化と、堤等琳の点描法などの指導で、躍動感溢れる作風となつて、世の絶賛を浴びるに至つた。

視点を低くおさえ、触手を伸ばして小舟に襲いかかるようにせり上がった大波、その波に翻弄される小舟、富士山が遠く小さく覗く。碎け散るしぶきは躍動感そのもので、二十数年前に伊八が彫った波図に、その原風景を見出し、外房の波濤をみでの碎け散るしぶきを点描法でみごとに表現したのである。斬新な表現に等琳の画法の咀嚼と、また「波の伊八」の影響で、北斎は世界に誇る名画を生んだのであった。（市原淳田）

北斎と等随の世界ひらく

蝮に追われた「土岐の鷹」描く

一介の油売りから美濃の太守にのし上がり、こともあろうに主君である土岐頼芸を国外に放逐し、自分が美濃一国の盟主におさまった、蝮の齋藤道三の名は余りにも知られている。

土岐頼芸は、もとより文人武将であった。伝えによると画僧周文に絵を学び、山水画を描き「鷹」の絵を得意とした。鷹は闘争本能の固まりのような猛鳥だ。皮肉にも代々土岐氏は「鷹」をシンボルとしてきた。鷹や獅子のように強く生きたい、土岐氏の願いだった。頼芸の描いた鷹図はどこか弱々しく感じられるとの評があるが、ここ行元寺に等随が描いた「土岐の鷹」は精悍で威厳にみちている。

土岐頼芸の 仏道修行

頼芸の万喜城亡命は三十年近く、その間行元寺で仏道修行に明け暮れた。時の行元

寺住職は豪譜で、その師は先代の豪覚法印だった。比叡山無動寺からきた高僧で、房州石堂寺の多宝塔建立に正木時茂と名を連ね、また美濃妙椿の名も残る。

頼芸は「大乘坊豪秀」といった。「豪」の一字を師から貰っている。「秀」は頼芸が好んだ文字だった。頼芸は万喜城で「牧閑斎」とか「徳秀斎」と号した。これから「頼芸」は「豪秀」そのものといえる。

行元寺には、「永禄八年（一五六五）八月五日大乘坊豪秀上総国伊南庄万喜城内にて書写し畢る」の「灌頂私記」が今に伝わっている。金剛界の灌頂私記で、十メートル以上もある長い経巻である。

等随の鷹絵と 獅子図

この土岐頼芸の話の聞いた等随は、「行元寺書院」の板戸に「白鷹と老梅」の図を描いた。

この土岐頼芸の話の聞いた等随は、「行元寺書院」の板戸に「白鷹と老梅」の図を描いた。



獅子図 一等随作かー
勝浦市 安藤敏晴氏 撮影

た。白鷹が老梅に羽を休め、頭を右に向け鋭い眼差しを見せている。右足の爪は力強く枝をつかんで鋭さに溢れる。

梅の木や椿、岩石などが緑青色に黒ずんでいるため、鷹が一層白く浮き出て狩野派の特色がよく出ている。特に注意すべきは梅の幹などに点苔描写が見られることだ。明らかに雪舟の雲谷派の系統を引く、三代堤等琳の影響を受けていることを知る。

筆者の等随は、画面の左方に「五楽」と墨書し「無為五楽」の二行からなる角印と、その下に「等随」の楕円形の朱印を捺してあることで判る。

等随は字は淡山、偏無斎と号し、今の栃木市片柳にあった寮坊五楽院に住したことから五楽院等随の名がある。画史によると三世堤等琳の弟子で古河藩の御用絵師を務め、上野寛永寺や浅草寺にも関係した。

もとより等随の元祖はと言えば、高松又八郎邦教にさか上り、その門下から後藤家、そして信秀が現れて磯部家の初代となって、その次男が儀右衛門で出家して画僧であった。

時の行元寺住職は、三十七

世栄長、三十八世乗有とも代々上野寛永寺伴頭職から晋山、昵懇の等随に書かせたことは言うまでもない。勿論堤等琳をも呼び寄せ、飯縄寺（いすみ市岬町和泉）本堂に天井画「龍図」を、また内陣天井の枅に花鳥図を描かせた。

ちなみに栄長や乗有が上野寛永寺にいるころ、若い葛飾北斎は上野坂下に住むなどして、「上野晩鐘」や「根本中堂」など描き、伴頭職との触れ合いは高く、人脈は広く展がりを見せてくれる。

かの葛飾北斎（一七六〇～一八四九）は一般には「赤富士」や「神奈川沖浪裏」の図で知られ親しまれている。これら「富嶽三十六景」といった風景画としての錦絵を描いたのは七十歳代の前半だが、風景画中心の活躍期となり、躍動感溢れる作風となって世の絶賛を浴びるに至った。してみると北斎や等随は堤等琳の弟子であり、兄弟弟子の間からと言って差しかえなからう。

等随はまた行元寺に「十六善神」の仏画も遺してくれた。大般若経の本尊である。

（市原淳田）

家康・家光・天海と亮運

家康・家光また大多喜城主の本多忠朝の帰依を受けた定賢は巖海とも称して、家康のブレン・天海の懐刀、東叡山初代学頭職を務めた。総州武射郡富田村（現山武市富田）に永禄元年（一五五八）に生まれ富田光明寺で難髪して定賢と名づけられた。

文禄三年（一五九四）光明寺を継ぎ、慶長九年（一六〇四）六月に行元寺住職に抜擢される。これは台教に通じ法華要旨を談じ博学多才の僧、しかも弁舌にすぐれ他宗に対抗できる人材であったからで

あった。

定賢は天海とその関係が密であったことから、天海と定賢は共に家康のもとに伺候する。古い記録では慶長十八年二月十八日、駿府城での論議に、天海と問答を行って家康から、餐と銀十枚、被物二領を贈られた。これによって「関東天台法度」が成立したことは行元寺定賢の大きな功績だっ



等随作「土岐の鷹と老梅」

寛永寺が建立され 行元寺亮運が学頭職に

た。慶長十八年には計四回、翌十九年には毎月数日にも及んで、家康の信頼はますます増して行く。のち定賢は巖海と改名したが、十九年正月に上総東金に鷹狩りに来た家康

一方、天海は秀忠から上野台地の一部を拝領、あと三代家光から上野忍ヶ岡の地と、秀忠の旧殿、白銀五万両を受

を、大多喜城主本多忠朝に代わって満足させる。家康没後、常州行方西蓮寺、下野佐野惣宗寺へ転じ寛永六年（一六二九）常州黒子千妙寺に移り亮運と名を改めた。

東叡山学問所は「東叡山学寮」と称し、その学頭職として亮運は敏腕を振うわけだが、こんな関係から行元寺が、伴頭拝領寺院として、学頭寺につぐ学問寺となる。その折に高松又八郎邦教によって彫刻等が施され、龍や牡丹に錦鶏といった、桃山文化を継承する豪華絢爛を誇る彫刻等を遺してくれたのである。

高松又八郎邦教は宮彫師の元祖で徳川家御用を務めたが、その制作は江戸城、寛永寺、芝増上寺などに限られ、地方に遺したのは稀れで、今のところ、行元寺の作品が現存日本唯一といわれ、各種彫刻を凌いだ名作とされている。（市原淳田）



元祖 幻の御用彫師 高松又八彫刻「牡丹と錦鶏」

